

知財業務におけるAI活用設計：「Can / Trust / Own」モデルに基づく次世代ガバナンス

Can (能力の境界)：予測機械としての認識

AIは「自律的思考」ではなく、確率に基づき次に来る言葉を予測する「予測機械」であることを認識し、類義語抽出や要約など特定の推論ステップの加速に活用します。

知財判断プロセスの分解と実務への適用



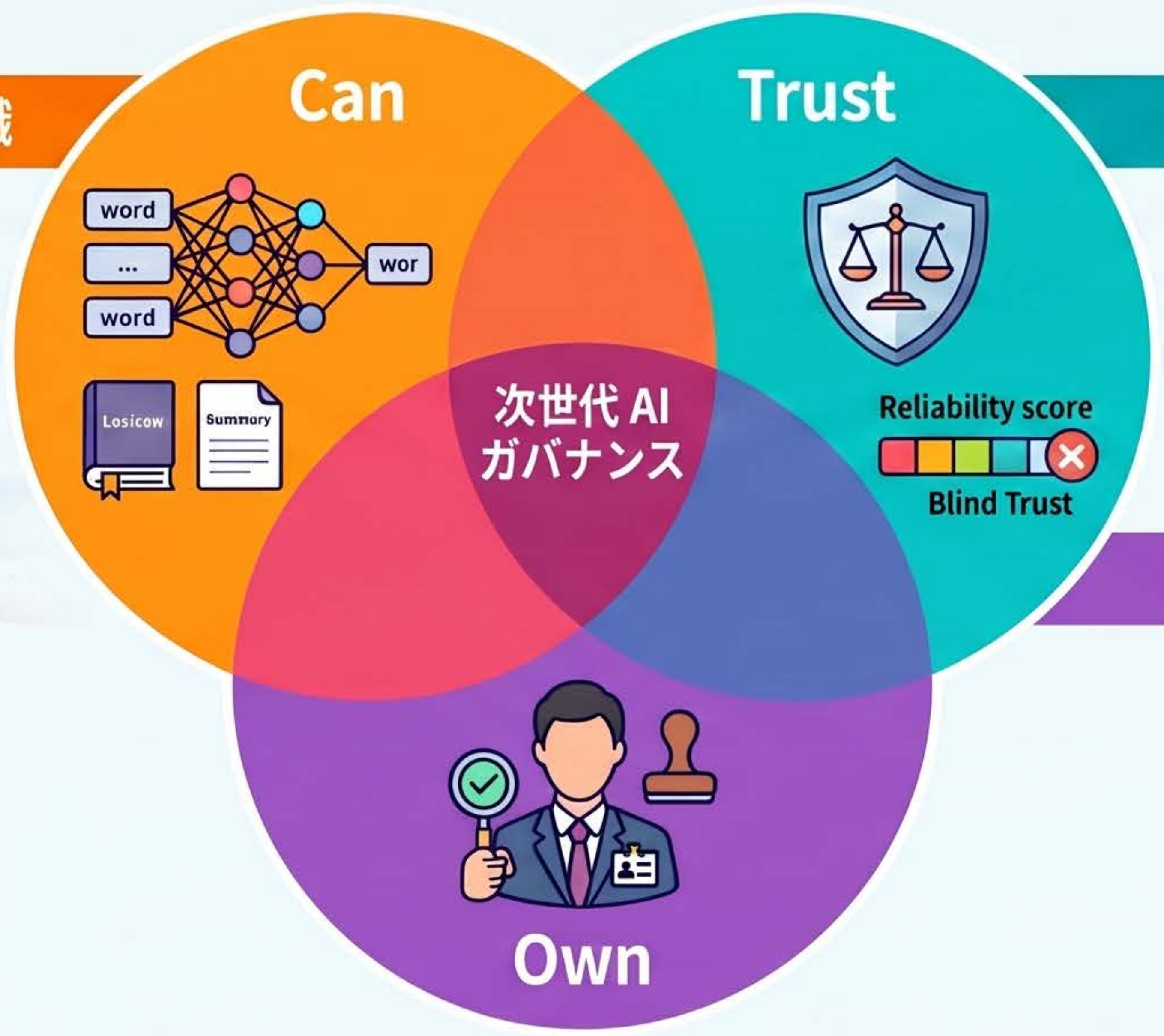
先行技術調査：セキュリティと網羅性の担保
未公開發明の漏洩を防ぐため「再学習不利用」のセキュア環境を「Own」し、AIの検索漏れ（サイレントリスク）を人間が補充することで「Trust」を担保します。



明細書作成：ハルシネーションの抑制
RAGや「Faithfulness (忠実性)」指標を用いて出力の正確性を自動評価し、進捗性などの戦略的判断は必ず人間が「Own」して決定します。



発明者連格性：人間による「寄与」の証明
USPTOガイダンスに基づき、AIの支援を受けつつも人間が独創的な課題設定や選択・統合を行った履歴を「実験ノート」等で詳細に記録・立証する必要があります。



Trust (信頼の工学)：道徳的責任の代替

AIは道徳的責任を負えないため、盲目的な「信頼」ではなく、RAG (検索拡張生成) による根拠提示や不確実性の定量化といった工学的な「依存 (Reliance)」の対象として設計します。

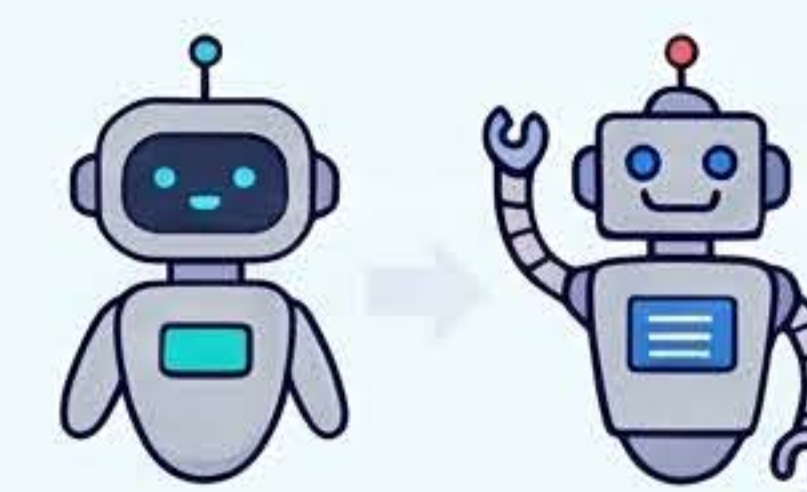
Own (統制と所有)：法的責任の帰属

受託者 (弁理士等) としての裁量的判断権を保持し、AI生成物に対する最終責任を人間が負うとともに、独自のワークフローを組織の資産として標準化します。

組織が構築すべきガバナンス体制



CAIOと知財・法務の戦略的協働
知財部門はルールの利用者にとどまらず、CAIO (AI統括責任者) と連携してAI法務のリスク管理や全社的なポリシー策定を主導すべきです。



汎用チャットボットから「特許特化型エージェント」へ
単なるプロンプト入力ではなく、自社の判断基準や過去の履歴をエンコードした専用エージェントを構築し、品質のばらつきを抑えた標準ワークフローとして内製化します。

「Can / Trust / Own」概念と知財実務の対比表

概念	ガバナンス上の要求事項	知財実務における具体例
 Can	認識的境界の把握と意図のアライメント	特許公報からの類義語抽出、明細書ドラフトの生成
 Trust	不確実性の提示と出力根拠の検証可能性	出典の明記、確信度が低い場合の「わかりません」応答
 Own	裁量的判断権の保持とスキルの標準化	弁理士による最終責任、自社専用の暗号化AI環境の構築